

ポライトネス・ストラテジーに反映された社会文化的規範

ータイ語・ジャワ語・日本語の断らない表現に焦点を当ててー

伊藤恵美子 *

Socio-cultural Norms Reflected in Politeness Strategies:
A Focus on Non-refusals in Thai, Javanese, and Japanese

Emiko ITO

Abstract

This paper aims to examine expressions used to avoid giving refusals to requests in the Thai, Javanese and Japanese languages. Data based on DCT (Discourse Completion Test) were collected from 135 informants: 50 Thai native speakers, 33 Javanese native speakers, and 52 Japanese native speakers. The DCT consisted of three variables: the status of the interlocutors (superior/equal), the relationship of the interlocutors (familiar/unfamiliar), and the native speakers' language group (Thai/Javanese/Japanese).

Based on analysis of the data according to semantic formulas, the results indicated that: 1) Even though the Thai, Javanese, and Japanese languages have honorific systems, the three languages show different politeness strategies, and thus it can be thought that politeness strategies are more related to socio-cultural norms than to honorific systems; 2) The politeness strategies of Thai, Javanese, and Japanese are affected more so by the relationship between interlocutors than the status of the interlocutors.

1. はじめに

言語によって文脈に依存する程度は異なり、他言語に比して日本語は文脈の依存度が高いと言われている (Hall, 1976: 86, 127)。また所与の場面で適切とされる言語表現は、その言語の背景にある社会文化的規範 (socio-cultural norm) に拠るので、言語によって適切性の基準は一樣ではない。外国語学習者の場合は母語の影響を受けやすく、目標言語と母語とで適切性の基準が大きく異なれば、そ

の学習者にとって目標言語における適切性の判断は容易ではない。

日本語教育の観点から、この問題を解決に導くには学習者が日本語を運用する際の状況に応じた日本語を判断できる能力、言い換えれば社会語用的誤り (sociopragmatic failure) を犯さないような能力を教育の現場は養成していくことが必要になる (伊藤, 2010: 35)。しかし今のところ語用能力の具体的な特徴のいくつかは見出されているものの、体系が解明されていないので語用能力を向上させる適切な指導法が確立されておらず (Kasper and Rose, 2001: 3)、教育現場での実践も進んでい

* 下関市立大学経済学部教授

国際開発研究科研究員 (2010. 10 ~ 2011. 3)

ない(清水, 2010: 29).

第二言語環境で学んでいる学習者は、文法的エラー (grammatical errors) よりも語用的エラー (pragmatic errors) のほうが深刻だ、と認識している報告が出されていることからわかるように (Bardovi-Harlig and Dörnyei, 1998: 254), 語用的なエラーはなおざりにしておけない非常に重要な問題である。

1990年代後半より、筆者は外国人留学生在が日本人と日本語でコミュニケーションを行う際に惹起する問題を教育現場から捉え、マレー語 (Bahasa Melayu)¹⁾を中心に社会文化的規範の観点から調査・分析を行ってきた。本研究は、伊藤(2001; 2002; 2004; 2005; 2010)など本稿に直接的に先行する研究を踏まえ、依頼場面で見られた表現を中心に、タイ語・ジャワ語・日本語を比較しながら検討を行う。本研究がタイ語とジャワ語を対象言語とするのは、言語の普遍性を追求するためには語族を異にし、かつ敬語体系を有する三言語の比較が望ましいと考えるからである。

ばれるので、ポライトネス研究は待遇表現研究の中に位置付けられている(岡本, 2006: 67)。

ポライトネス理論の中心概念はFTA (Face Threatening Act) である。人間には、他人に理解・称賛されたいポジティブ・フェイス (positive face) と、他人に邪魔されたくないネガティブ・フェイス (negative face) の二つのフェイスを保ちたい欲求があり²⁾、このフェイスを脅かすような行為がFTAになる。ポジティブ・フェイスに働きかけるストラテジーをポジティブ・ポライトネス、ネガティブ・フェイスを尊重するストラテジーをネガティブ・ポライトネスと呼ぶ。フェイスの侵害度は、話し手と聞き手の社会的距離と、話し手と聞き手の力関係と、相手にかける負担の度合の和で表され、負担の度合は文化によって異なる (Brown and Levinson, 1987: 74-83)。フェイスの侵害度は次のように公式化されている (宇佐美, 2010)。

$$Wx = D(S, H) + P(S, H) + Rx$$

2. 分析の枠組みと研究目的

2.1 理論的背景

本研究は分析の枠組みとして、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論 (politeness theory) を採用する。“politeness”は、その概念が日本に紹介された当初は「丁寧さ」と訳した論文等も散見されたが、近年は敬語との混同を避けるために片仮名表記「ポライトネス」が一般的である。ポライトネスは対人関係における調節機能であり、体系としての敬語の有無に関わらず人間の言語行動における普遍性を具えている (生田, 1997: 66)。また、広い範囲の対人配慮表現は待遇表現と呼

Wx : 行為 (x) のフェイス侵害度

D : 話し手 (Speaker) と聞き手 (Hearer) の社会的距離 (Social Distance)

P : 聞き手 (Hearer) の話し手 (Speaker) に対する力 (Power)

Rx : その文化において特定の行為 (x) が意味する負荷 (absolute ranking of impositions)

2.2 タイ語とジャワ語の特徴

タイ語は従来シナ・チベット (Sino-Tibetan) 語族に帰属するとされてきたが、諸説もあり、現在分かっているのはタイ・カダイ族 (Tai-

Kadai) に属するということまでである (Hudak, 1987: 757; 三谷, 1989: 531). タイ語は、音韻面では単音節型声調言語 (monosyllabic tonal language), 統語面では典型的な孤立語 (isolating language) の特徴が認められる (三谷, 1989: 531-544). つまり、タイ語には動詞の活用がなく語形が一定していて、性・数・格・人称・時制を示す標識がない (赤木, 1989: 164). タイ語はラテン文字や漢字で表記される言語ではなく、13世紀末にクメール文字に範を取って造られたタイ文字を用いる。 (富田, 1990: 13). 14世紀中葉に王制が国家機構として整備されて王族の階級・特権に勅令が出され (綾部, 1971: 94), サンスクリット (Sanskrit) に起源を持つ王族の称号・階級・人称代名詞等が急増した (Hudak, 1987: 758-759). 王族に関して使用される特殊な言語である王語, 僧侶に対して使用される僧語は、タイ文化の核を成す国王と仏教の権威を高めている (赤木, 1989: 169-171).

他方、ジャワ語はオーストロネシア (Austronesian) 語族に属する言語で、古ジャワ語を継承し、非常に長い文化的伝統を有している。ジャワ語は宮廷のある中部ジャワのソロ (Solo) やジョクジャカルタ (Jogyakarta) の方言が標準とされ、宮廷を中心とするジャワ文化を反映しており、特徴として複雑な敬語体系が挙げられる (崎山, 1989: 209-212). ジャワ語の敬語に見られる複雑性は、話し手と聞き手の地位や年齢など相対的關係によって用いられる言葉の階層が幾重にもあり、相手に応じて適切な形態が選ばれるところにある (崎山, 1974: 96). ジャワ語は南インドのパラヴァ (Pallava) 文字に由来するジャワ文字が使われていたが、現在はラテン文字

化されている (崎山, 1989: 209).

2.3 先行研究の概観

複数の言語文化を発話行為の観点から分析する分野を比較文化語用論 (cross-cultural pragmatics) と言い、Blum-Kulka and Olshtain (1984) に端を発する。比較文化語用論でアジアの言語を扱った初期の研究としては、英語・ドイツ語・ポルトガル語・ブルガリア語の印欧語と、日本語・中国語・韓国語・タイ語・インドネシア語の東洋系言語を、主に依頼行為の観点から比較した橋元 (1992) が有名である。分析の結果、依頼行為以外で相手が負担するコストが大きいと考えられる発話行為においては、日本語・インドネシア語・韓国語では社会的地位の高低により、英語・ドイツ語・中国語では人間関係の親疎によりストラテジーの使い分けが行われやすい傾向が見出された。ただし、タイ語に関しては、代替案の提示は社会的地位の高低によって、規則の陳述 (駐車禁止の注意) は人間関係の親疎によって、ストラテジーの使い分けが行われやすいようであり、他の言語と異なる傾向が見られた。

タイ語母語話者による研究には、小説の台詞から断り表現の特徴を比較したキッティ (1994), 教育面から依頼行為を考察した堀江 (1995), 断り行為を調査・分析したルンティーラ (2004) などがある³⁾。キッティ (1994) は、タイ語と日本語の小説から断り表現を取り出し、タイ語の特徴としてタイ人は目下に対してより目上に対してのほうが婉曲的な断り方をすること、同等の関係では親しい相手に対してより、疎遠な相手に対してのほうが婉曲的な断り方をすることを見出した。堀江 (1995) は、タイで使用されている日本

語の教科書から依頼表現を拾い出して、タイ語と日本語は文型・スタイルに大きな違いがあり、その違いは言語の背景にある社会・文化・価値観の影響であると、母語話者の直観(intuition)で考察しているが、実証的な検証は行っていない。ルンティエラ(2004)は、Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz(1990)を参考に提案に対する断り行為について調査を行い、日本語もタイ語も断り行為の全てに理由が出現すること、日本人は相手が目上かどうかを考慮して、タイ人は相手との親疎関係を考慮して表現を選択することを検証している。

ジャワ語を対象にした語用論ベースの先行研究は非常に限られる。スリ(2009)はジャワ語話者に対してアンケートとインタビュー調査を行い、ジャワ語の絶対敬語の特徴が既婚女性によって守られている一方で、既婚男性や若年層では相対的な使用も広がりつつあることを報告している。

本研究の直接的な先行研究は、日本語・ジャワ語・インドネシア語を比較した伊藤(2005)である。伊藤(2005)は、体系としての敬語を持つジャワ語は相手との距離を置くことで丁寧さを表現する傾向が、敬語を持たないインドネシア語は相手に積極的に働きかけることで丁寧さを表現する傾向が強いことを見出し、敬語の有無がポライトネス・ストラテジーに関与すると考察している。本研究は伊藤(2005)の分析方法に準じて、タイ語・ジャワ語・日本語を比較し、敬語体系とポライトネス・ストラテジーの普遍性を追究する。

2.4 研究目的

研究目的は、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論に基づき、話し手と聞き

手の社会的距離を「親疎関係」として、話し手と聞き手の力関係を「地位」として、相手にかかる負担の度合をタイ語母語話者・ジャワ語母語話者・日本語母語話者の「文化差」として、場面別の言語表現を比較することである。

本研究では前提発話行為は依頼行為とするので、調査紙の項目のうち依頼場面のみを対象とする。先行研究のBeebe, Takahashi and Uliss-Weltz(1990)や生駒・志村(1993)では「高級レストランで賄賂を贈られる」や「従業員から昇給を要求されている」など職場の場面が設定されているが、これは学生にとって現実的ではないので、留学生の意見を参考にして場面を設定した。対話の相手と場面状況の一覧表を表1に掲げる。

表1 場面設定

場面	対話の相手	状況
1	親しい友達	会議の代理出席を頼まれる
2	親しくない学生	会議の代理出席を頼まれる
3	担任の先生	翻訳を頼まれる
4	担当以外の先生 ⁴⁾	翻訳を頼まれる

出所：筆者作成

3. 調査

3.1 調査対象者

調査はタイ・インドネシア・日本で行った。本稿は、フェイスの侵害度と負担の観点から、回答に影響を与える母語の社会文化的規範について検討することが目的なので、タイとインドネシアで回収した調査紙はタイ語とジャワ語の母語話者のみを有効回答とした。有効回答数の一覧表を表2に示す⁵⁾。

日本語はベースデータとなるので、日本の社会文化的規範を身に付けていると考えられ

表2 有効回答の内訳

対象者	母語	調査国	回答(名)
タイ人	タイ語	タイ	50
インドネシア人	ジャワ語	インドネシア	33
日本人	日本語	日本	52

出所：筆者作成

る有職の社会人を対象にした。他方、タイ語とジャワ語は、本稿は留学生のコミュニケーション問題を日本語教育の観点から考察を行うので、来日する留学生と同じ文化的背景を持ち、日本語を専攻していない大学生に対して行った。

3.2 調査期間

調査は、タイでは2007年9月、インドネシアでは1999年8月下旬、日本国内では同年7月から10月にかけて行った⁶⁾。

3.3 実施方法

調査は調査紙を用いて、タイ人に対してはタイ語版、インドネシア人に対してはインドネシア語版⁷⁾、日本人に対しては日本語版で行った⁸⁾。タイではタイ商工会議所大学(The University of the Thai Chamber of Commerce: UTCC)を、インドネシアではディポネゴロ大学(Universitas Diponegoro: UNDIP)を筆者が訪問し、UTCCでは日本語学科の学生の協力を得て、UNDIPではアセアン学生協会の協力を得て、学内の日本語を専攻していない学生に対して調査を行った。

調査紙調査の後、数人の学生に対して記述した回答について、フォローアップ・インタビューも行った。

3.4 手続き

調査紙は、談話完成テスト(Discourse Completion Test: DCT)⁹⁾とフェイス・シートから構成される。DCTは場面設定と会話の相手の台詞と、その台詞に応える応答を書き入れる空白欄から成る。場面1のDCTの設問例を[例1]に示す。

[例1] 親しい友達に学生会議に代わって出てほしいと言われました。明日は定期試験で、今まで全然復習しなかったので勉強しなければいけません。

友達：今から病院に行かなければいけないから、代わって会議に出てくれないかなあ。

私： _____

3.5 分析方法

まず、インドネシア語版とタイ語版のDCTは各言語を母語とする留学生の意見を参考にして日本語に翻訳した¹⁰⁾。インドネシア語の翻訳は日本国政府国費外国人留学生制度の日本語・日本文化研修留学生プログラムで名古屋大学に留学中のインドネシア人2名の、タイ語の翻訳はタイで日本語を教えているタイ人の大学教員1名のチェックを受けている。次に、発話内容の分析はDCTで得た発話から意味公式(semantic formulas)を抽出して

表 3 意味公式の分類

意味公式	意味機能	例
{結論}	直接的な表現の断り	行けない/無理です/できない
{理由}	相手の意向に添えない旨の表明	定期試験があるので
{詫び}	相手の意向に添えないことを負担に感じている旨の表明	申し訳ありません/ごめんね/勘弁して/おこらないで
{代案}	相手との関係を維持したい旨の積極的な働きかけ	～さんに頼んでみたらどう?/代わりを探そうか
{共感}	相手の意向に添いたい心情の表明	行きたいけど/残念ですが/したくないことはないけど
{感謝}	相手の行為により恩恵を受けたことの表明	ありがとうございます/ありがたいんですが
{情報}	相手の発話内容を確認	今からですか/何時から?/明日まで?
{条件}	断りの留保	レポートを書いてから/時間があれば/約束はしないけど
{承諾}	明確な承諾	行きます/やります/わかりました
{その他}	上記に該当しないもの	ちょっと……/あのう……/えーと

出所：筆者作成

から、その意味公式を機能別に分類した。コーディングは協力者（日本語母語話者）と筆者の2名で行い、一致率は87.4%であった。

意味公式とは、Blum-Kulka and Olshtain (1984) や Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz (1990) や生駒・志村 (1993) などで、発話の分析に使用されている意味的なまとまりの単位であり、「発話行為を分析する際の単位」（藤森, 1994: 5）と定義される。なお、意味公式は { } で表示する。

本稿は調査対象者に断りの回答を書くよう誘導していないので、(1) 断り行為の代表的な先行研究 Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz (1990) の分類, (2) Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz (1990) を日本語の分析に導入した藤森 (1994) の分類, (3) 藤森 (1994) の分類にてマレー語を分析した伊藤 (2004) を踏まえて、{情報} {条件} {承諾} {その他} を追加・修正した。発話の代表的な例とその意味公式を、表3に示す。

[例2] は、場面1の回答例で、断りを回避した発話である。回答欄に「病気なの？ 代わって会議に出ても、いいよ」と記載されていたので、意味内容によって分ける。「病気なの？」が {情報}、「代わって会議に出ても、いいよ」が {承諾} の意味機能を担っているため、回答例は {情報} {承諾} の意味公式に分類される。

[例2] 親しい友達に学生会議に代わって出てほしいと言われました。明日は定期試験で、今まで全然復習しなかったため勉強しなければいけません。
 友達：今から病院に行かなければいけないから、代わって会議に出てくださいかなあ。
 私：病気なの？ 代わって会議に出ても、いいよ。

表4 場面別の {承諾} {条件} の頻度

単位：回

母語	〈場面1〉 同等の親しい相手		〈場面2〉 同等の疎遠な相手		〈場面3〉 目上の親しい相手		〈場面4〉 目上の疎遠な相手	
	{承諾}	{条件}	{承諾}	{条件}	{承諾}	{条件}	{承諾}	{条件}
タイ語	23	4	3	0	9	6	3	5
ジャワ語	9	5	5	0	6	3	0	5
日本語	14	5	1	1	5	15	1	8

出所：筆者作成

4. 結果と考察

4.1 場面別の分析

調査は、対話の相手の地位（目上・同等）、および対話の相手との親疎関係（親しい・疎遠）を考慮に入れて調査項目を立て、相手からの依頼を断らなければならないだろうと思われる状況を場面として設定した。ポライトネス理論によれば、どのような発話行為も多少の差はあれ、フェイスの侵害に関与するが（笹川，1994）、断り行為は会話の相手に対して「済まない」という感情を伴い、特に心理的負担が大きく、現実社会では断らない選択もあり得る。断り行為の調査では、調査紙に「断ってください」と指示したり、調査対象者に回答を誘導するリジョインダー（rejoinder）¹¹⁾を付けたりすることが一般的に行われているが、本稿は伊藤（2004）などに準じて断りの回避が選択できる余地を残した。これにより、断り行為が一般的には想定される状況にもかかわらず、断りを回避した場合、それは背景にある社会文化的規範が言語化されて回答（断りの回避）として表出したと判断される。よって、社会文化的規範をキーワードとする先行研究の流れを汲む本稿は、分析対象を断らなかった発話に限定する¹²⁾。

断らなかった発話とは、表3に挙げた意味

公式の {承諾} と {条件} が該当する。{承諾} は「わかりました」に代表される明確な承諾の表明であり、{条件} は「レポートを書いてから」のような断り行為を実現するか否かを話者本人が明言していない意味内容である。

表4に、場面別の {承諾} と {条件} の一覧表を挙げる。なお、表2に示したように言語により有効回答数が異なるので、回数は有効回答50名に修正した。

まず場面別に概観し、次に先行研究と比較しながら検討していきたい。〈場面1〉同等の親しい相手からの依頼に対して、{承諾} はジャワ語、日本語、タイ語の順に頻度が高くなるが、{条件} は三言語ともほぼ同じ頻度である。

〈場面2〉同等の疎遠な相手からの依頼に対して、{承諾} {条件} の頻度は〈場面1〉に比べて大きくダウンし、{承諾} は、タイ語は約1/8の3回、ジャワ語は半減の5回、日本語はわずか1回に減少する。{条件} も同様に大幅に減少し、三言語とも1回ないしは0回とほぼ同じ傾向を示す。

〈場面3〉目上の親しい相手からの依頼に対して、{承諾} は〈場面1〉と同じように、ジャワ語・日本語に比してタイ語の頻度がやや高い。{条件} はジャワ語、タイ語、日本語

の順に頻度が上がる。

〈場面4〉目上の疎遠な相手からの依頼に対して、{承諾}は三言語とも4場面の中で最も頻度が低い。{条件}はタイ語とジャワ語は同数、日本語は両言語に比べてやや頻度が高い。

キッティ(1994)にはタイ人は目上の相手に対して婉曲的な断り方をするとあるので、明確な断りを回避する選択、つまり断りを留保する{条件}や{承諾}が目上の相手に多く出現するかと予想されたが、本稿で{承諾}が最も頻出したのは同等の親しい相手であった。{条件}については上下関係において際立った傾向は特に見られない。

他方、ルンティエラ(2004)にはタイ人は相手との親疎関係により表現を選択するとある。表4で親疎関係の異なる〈場面1〉と〈場面2〉、〈場面3〉と〈場面4〉をそれぞれ比較すると、疎遠な相手よりも親しい相手に対して{承諾}も{条件}も多く出現しており、本稿の結果はルンティエラ(2004)と一致する。

キッティ(1994)が小説の台詞に資料を求めたのに対して、ルンティエラ(2004)はDCTで資料を集めた。本稿もDCTによりデータを収集した。よって、結論を導く資料の違い、言い換えれば文学上の表現(書き言葉)と日常会話(話し言葉)の相違、あるいは資料に

反映された時代(小説に描かれた時代と現代)に優勢なストラテジーの選択が結果を左右したと考えられよう。

橋元(1992)では日本語は社会的地位の高低によりストラテジーの使い分けが行われるとあり、本稿においても{条件}に関しては同様の傾向が見られるが、{承諾}に関しては疎遠な相手の場合は上下関係に関わらず頻度は同数、親しい相手の場合は目上より同等に対するほうが頻度は高く、親疎関係が大きな影響を与えているようである。

4.2 地位別の分析

さらに伊藤(2005)に準じて4.2で地位別、4.3で親疎関係別で検討を加えていく。表5は、表4のデータを地位別に目上と同等に二分したものである。

まず目に付くのは、目上の相手からの依頼に対する{条件}を除いて、目上の相手からの依頼に対する{承諾}も同等の相手からの依頼に対する{承諾}も同等の相手からの依頼に対する{条件}も、日本語とジャワ語がほぼ同じ頻度で出現していることである。日本語とジャワ語のポライトネス・ストラテジーは、近似しているようである。本稿においてタイ語がジャワ語・日本語と同じような傾向を示さないことは、東洋系言語と同じ傾向がタイ語に見られないと考察した橋元

表5 地位別の{承諾}{条件}の頻度

単位：回

母語	目上の相手		同等の相手	
	{承諾}	{条件}	{承諾}	{条件}
タイ語	12	11	26	4
ジャワ語	6	8	14	5
日本語	6	23	15	6

出所：筆者作成

(1992) と通底するところがある。

タイ語は目上からの依頼に対する {承諾} も、同等の相手からの依頼に対する {承諾} も、日本語・ジャワ語の約2倍の頻度で現れている。日本語母語話者・ジャワ語母語話者より、タイ語母語話者のほうが断らない傾向が強い。タイ語文化では、依頼に対する断り行為の重みが高いという言い方ができる。また、目上の相手からの依頼に対して留保条件をつけるという反応が多いのは「安請け合いをして約束を破ることになっては困る」という心理が働いているとも考えられる。

三言語とも {承諾} については目上の相手より同等の相手に対して頻度が高いが、{条件} については逆に同等の相手より目上の相手に対して頻度が高い。目上の相手より同等の相手に対してのほうが {承諾} の頻度が高いのは、各言語集団で社会全体における人間関係が縦から横にシフトしてきていることと無縁でないだろう¹⁹⁾。{条件} について同等の相手より目上の相手に対して頻度が高い現象は、フォローアップ・インタビューでよく聞かれた「先生に頼まれたら、嫌とは言えない……できる限りやる」という回答者の心情に合致する。

4.3 親疎関係別の分析

表6は、表4のデータを親疎関係別に親し

いと疎遠に分けたものである。

三言語に共通した傾向は、親しい相手より疎遠な相手に対して {承諾} も {条件} も頻度が低い、つまり断る蓋然性が高いことである。親しくない人に対しては、相手の意に添えなくてどうしようとする葛藤することがなく、断りやすいということなのであろう。

一方、親しい相手に対しては {承諾} はジャワ語・日本語に比べてタイ語の頻度が高く、{条件} はタイ語・ジャワ語に比べて日本語の頻度が高く、言語により異なりが見られる。

タイ語において {承諾} が顕著なのは、前節で見たようにタイ語文化では依頼に対する断り行為の重みが高いのであろう。日本語で {条件} が多いのは、ひとまず断りを留保して、後日決断するという日本人の行動様式が窺える。

上記より、どの言語においても親疎関係がポライトネス・ストラテジーに大きい影響を与えていることがわかる。社会の変化が言語に影響を与えている身近な例としては、敬語はかつては絶対敬語であったが、現代日本語では相対敬語へと変化したことが挙げられる。絶対敬語では上位者は上位者として聞き手や場面に関係なく常に高く待遇されるのに対して、相対敬語では同じ対象であっても聞き手や場面に依りて待遇表現が切り替わる(森野, 2003: 194)。絶対敬語から相対敬語へという

表6 親疎関係別の {承諾} {条件} の頻度

単位：回

母語	親しい相手		疎遠な相手	
	{承諾}	{条件}	{承諾}	{条件}
タイ語	32	10	6	5
ジャワ語	15	8	5	5
日本語	19	20	2	9

出所：筆者作成

流れは敬語史の中で見逃すことのできない現象とされている(辻村, 1992:282)。

また、ジャワ語とインドネシア語の使い分けについて、日本国政府の国費外国人留学生制度で来日した筆者の指導生(男性)は「ジャワ語は話せるが相手によって言葉を慎重に選ばなければいけないので、上下関係をはっきりさせたくないときはインドネシア語で話すし、現代は平等意識が強まってきているからジャワ語が使えても使わない若者も増えている」と説明してくれた。ジャワ語は相手の地位に応じて、意味が同じで丁寧度が異なる幾つもの語の中から最適の一語を常に選択して話さなければならないが、既婚男性や若年層ではそれが緩やかになってきていると、スリ(2009)は報告している。留学生の意識はこの報告と志向が同じであり、絶対敬語から相対敬語への変化は現代語の大きな潮流と捉えられよう。

4.4 議論

伊藤(2005)は、インドネシア語に比して日本語とジャワ語でポライトネス・ストラテジーが似ているのは両言語に共通して敬語があるからだとしている。敬語がある言語は相手や状況に応じた語彙を敬語セットの中から選ぶことができるので、選択を誤らなければ、敬語がない言語に比べてコミュニケーション上大きな問題は生じないだろう。したがって、敬語を持たない言語(インドネシア語)に比べて、体系としての敬語を持つジャワ語は相手との距離を置くことで丁寧さを表現する傾向が強い、と伊藤(2005)は結論付けている。

しかし、ここで敬語を分析のキーワードとするなら、タイ語にも敬語があることを忘れてはならない。ジャワ語もタイ語も日本語も

敬語体系を有するが、本稿ではタイ語のポライトネス・ストラテジーはジャワ語・日本語のそれとはやや異なる様相を見せたことから、ポライトネス・ストラテジーに影響するのは敬語よりもむしろ母語に根差す社会文化的規範ではないだろうか、という推論ができる。

ポライトネスは対人関係における調節機能であり、体系としての敬語の有無に関わらず人間の言語行動における普遍性を持つものであった(生田, 1997:66)。ポライトネスは広い範囲の対人配慮表現であるとも言え換えられる。ポライトネスが対人配慮表現・待遇表現と位置付けられるなら、敬語という閉じられた系(言語)より、開かれた系(文化)の影響を強く受けると考えるほうが自然ではないだろうか。タイ語もジャワ語も日本語も敬語体系を有するので、ポライトネス・ストラテジーは個別言語の背景にある文化、換言すれば社会文化的規範に規定されていると解釈すれば、タイ語と日本語のスタイルの違いは言語の背景にある社会・文化・価値観の影響であると分析した堀江(1995)の考察を支持することになる。

三言語に共通する特徴に注目すれば、対話の相手の地位に関して、{承諾}については目上の相手より同等の相手に対して頻度が高く、{条件}については同等の相手より目上の相手に対して頻度が高い。また、対話の相手との親疎関係に関して、{承諾}{条件}とも疎遠な相手より親しい相手に対して頻度が高い。よって、タイ語・ジャワ語・日本語のポライトネス・ストラテジーはともに上下関係よりも親疎関係のほうに重みがある社会文化的規範、すなわち言語の基底にある個別文化を具現化していると言えよう。

5. 結びと今後の課題

本研究は、断りが行われるだろうと予測される状況の下、同等の親しい相手・同等の疎遠な相手・目上の親しい相手・目上の疎遠な相手から依頼を受けて、タイ語・ジャワ語・日本語の各母語話者が断りを回避した表現に焦点を当てて検討した。分析の結果、次の二点が明らかになった。

第一は、日本語とジャワ語はほぼ同じような傾向を示したが、タイ語は様相をやや異にした。三言語とも敬語体系を有するので、この違いは言語より、むしろ社会文化的規範に負っていると考えられる。

第二は、三言語とも疎遠な相手より親しい相手に対して断りを回避する傾向が強く見られた。よって、三言語のポライトネス・ストラテジーはともに上下関係よりも親疎関係の影響を受けていることが示唆された。

さらに、本研究により、伊藤（2005）の議論は言語から社会文化的規範へとパラダイムが転換され、分析は精緻化された。また、対照研究は二言語より三言語で行うほうが望ましいことも示された。

最後に、今後の課題として二点挙げる。第一は、本稿が行った意味公式の頻度の分析に順序・内容の分析を加え、発話を包括的に理解することである。第二は、本稿で得られた結果、つまり社会文化的規範が表出する言語表現を日本語教育の学習項目に入れて、学習者の語用能力を養成することである。

付記

本稿は2007～2008年度下関市立大学特定奨励研究費、および平成20年度～平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「東南

アジアの言語のポライトネス：タイ語の場合」(課題番号：20520475)の助成を受けて行った研究成果の一部で、ICJLE2010世界日本語教育研究大会（台湾国立政治大学、台北）での発表に加筆修正を大きく加えたものである。データ収集と翻訳にご協力くださったタイ商工会議所大学・ディポネゴロ大学の先生と学生の皆様、ICJLE2010で貴重なコメントをくださった先生方、および客員研究員として受け入れてくださった名古屋大学大学院国際開発研究科木下徹先生、木下ゼミで意見をお寄せくださった学生の皆様、ならびに丁寧に査読くださった匿名の先生方に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 植民地から独立国家に変貌を遂げたのを機に、マレー語はマレーシアではマレーシア語、インドネシアではインドネシア語と、国家統合の観点から呼ばれている。
- 2) 宇佐美（2008）は、“positive face”を「ポジティブ・フェイス」、 “negative face”を「ネガティブ・フェイス」と表記してきたが、同じ意味を表す “positive face want” “negative face want”により「欲求」であることを強調したほうがわかりやすい、と記している。
- 3) 留学生による研究は修士論文として数本まとめられているが、ダヌッ（1995）など本人と連絡が取れなくて閲覧が許可されなかった論文が多く、筆者が内容を直接確認できたのはキッティ（1994）1本であった。
- 4) 学生（調査対象者）にとって面識はあっても、授業を担当してもらっていない先生を想定している。
- 5) インドネシアの調査で使用した言語は、3.3実施方法で記したようにインドネシア語である。当初、インドネシアでの調査はインドネシア語母語話者からデータを収集するつもりで進めていた。ところが、調査紙を回収してインフォーマントの母語をチェックしたところ、ジャワ語が優勢な中部ジャワのディポネゴロ大学で調査

したこともあり、インドネシア語とジャワ語の母語話者が同数だったので、両言語の母話話者を区別して分析の精緻化を図ることにした。本稿では敬語が認められる三言語の比較を試みるために、母語がジャワ語のインフォーマントを分析対象とした。

- 6) 1999年の資料に2007年のデータを追加して分析を行ったので調査期間に隔たりがあるが、言語の背景にある社会文化的規範は数年で容易に変わる性質のものではないと考えられる。また、先行する研究と比較するため、分析方法は伊藤(2004;2005)に準じている。
- 7) インドネシアの国語(Bahasa Negara: 国家語)は1945年憲法第36条でインドネシア語(Bahasa Indonesia)と指定されたが、インドネシア語を導入するために小学校ではアチェ語・スンダ語・ジャワ語など8言語が媒介言語として使われている(柴田, 1995: 712-717)。インドネシアは200を越すとされる言語と民族を統一するため、インドネシアのほぼ全域で理解され、どの民族の母語でもないリンガフランカのマレー語を国民形成の象徴として国語に採用し、インドネシア語と命名した(舟田, 1997: 85-86)。
- 8) 本稿を含む一連の研究は、日本語学習者の語用的エラーの解決策を探ることを目的として行っているので日本語習得中の留学生からもデータを取っているが、本稿の分析対象は日本語母語話者と日本語を専攻していないタイ語とジャワ語の母語話者から収集したデータである。
- 9) DCTは自然発話に比べれば不自然さは否めないものの、変数のコントロールが可能なこととデータを多量に収集できることから極めて現実性の高い方法であり、多くの調査で用いられている。方法論研究では断り行為の典型的な例は自然発話よりDCTから採取できるとの報告(Beebe and Cummings, 1996: 80-81)、6種類のデータ収集の方法を統計的に検討した研究ではDCTはデータの信頼性が非常に高く発話の収集手段として有効であるとの結論が出されている(Yamashita, 1996: 77)。
- 10) 過去に分析した言語との比較を前提にしているので、これまでの分析方法を踏襲し、日本語に翻訳してから分析を行った。
- 11) 次の設問(Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz, 1990: 71)では、Friendの2回目のことばがリジョインダーである。

A friend invites you to dinner, but you really can't stand this friend's husband/wife.

Friend: How about coming over for dinner Sunday night? We're having a small dinner party.

You: _____

Friend: O. K., maybe another time.

- 12) 比較文化語用論では、発話は順序・頻度・内容の観点から分析される。二言語比較の場合は一本の論考で三つの観点から論じられることが多いようであるが、多言語比較の場合は字数制限との兼ね合いもあり、分析結果のうち特に顕著な特徴だけが記述されているように見受けられる。本稿は三言語の詳細な比較を目的としているので論点が拡散する恐れがあるので、伊藤(2005)に倣って頻度の分析に限り、順序・内容、および統計的分析については別の機会に譲りたい。
- 13) 社会の構造が変われば、その社会を構成する人々の敬語行動や敬語意識は社会変動とともに変わっていく(吉岡, 2003: 118-119)。日本を例にとれば、1945年の敗戦により、天皇の神格性の否定、日本国憲法による華族・士族・平民の別の廃止などで民主主義が普及し、身分地位に関わる敬語への規制力が弱まった(辻村, 1992: 577)。人々の平等意識が高まるにつれて相手の人権を尊重することが求められるようになってきたのである(吉岡, 2003: 125-126)。

参考文献

- 赤木攻. 1989. 『タイの政治文化：剛と柔』勁草書房.
- 綾部恒雄. 1971. 『タイ族：その社会と文化』弘文堂.
- Bardovi-Harlig, Kathleen and Dörnyei, Zoltán. 1998. Do language learners recognize pragmatic violations?: Pragmatic versus grammatical awareness in instructed L2 learning. *TESOL Quarterly*. 32(2): 233-262.
- Beebe, Leslie M., and Cummings, Martha C. 1996. Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In S. M. Gass and J. Neu, eds. *Speech acts across cultures*, 65-86. New York: Mouton de Gruyter.
- Beebe, Leslie M., Takahashi, Tomoko and Uliss-Weltz, Robin. 1990. Pragmatic transfer in ESL

- refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen and S. D. Krashen, eds. *Developing communicative competence in a second language*, 55-73. New York: Newbury House.
- Blum-Kulka, Shoshana and Olshtain, Elite. 1984. Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP) *Applied Linguistics*. 5(3): 196-213.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ダヌッ スウエトラコム. 1995. 「タイ人日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー: 『断り』行為を中心として」名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文(未公開).
- 藤森弘子. 1994. 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー: 『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語・日本語教育論集』1: 1-19.
- 舟田京子. 1997. 「インドネシアの言語と文化」小野沢純(編著)『ASEANの言語と文化』高文堂出版社: 73-107.
- Hall, Edward T. 1977. *Beyond Culture*. New York: Anchor Books.
- 橋元良明. 1992. 「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」『日本語学』11(12): 92-101.
- 堀江 インカピロム プリヤー. 1995. 「依頼表現の対照研究: タイ語の依頼表現」『日本語学』14(10): 76-83.
- Hudak, Thomas J. 1987. Thai. In B. Comrie, ed. *The World's Major Languages*, 757-775. London: Croom Helm.
- 生駒知子・志村明彦. 1993. 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 『断り』という発話行為について」『日本語教育』79: 41-52.
- 生田少子. 1997. 「ポライトネスの理論」『月刊言語』26(6): 66-71.
- 伊藤恵美子. 2001. 「ポライトネス理論の実証的考察: 心理的負担の度合を中心に意味公式の数値の観点から」『日本語教育論集』17: 1-20.
- 伊藤恵美子. 2002. 「マレー語母語話者の語用的能力と滞日期間の関係について: 勧誘に対する『断り』行為に見られる工学系ブミプトラのポライトネス」『日本語教育』115: 61-70.
- 伊藤恵美子. 2004. 「マレー語母語話者のポライトネスの諸相: 勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から」名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士論文(未公開).
- 伊藤恵美子. 2005. 「体系としての敬語を持たない言語は丁寧さをどう表現するのか?: 断り表現におけるジャワ語とインドネシア語」『ことばと人間』5: 11-20.
- 伊藤恵美子. 2010. 「依頼場面に見られる断り表現の特徴: 日本語・ジャワ語・インドネシア語・マレーシア語・タイ語の比較」『留学生教育』15: 35-44.
- Kasper, Gabriele and Rose, Kenneth R. 2001. Pragmatics in language teaching. In K. R. Rose, and G. Kasper, eds. *Pragmatics in Language Teaching*, 1-9. New York: Cambridge University Press.
- キッティ プラサーストック. 1994. 「日・タイ断り表現の対照」慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻修士論文(未公開).
- 三谷恭之. 1989. 「タイ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂: 529-545.
- 森野崇. 2003. 「中古の共時態としての敬語, 動態としての敬語」菊地康人(編)『朝倉日本語講座8 敬語』朝倉書店 177-199.
- 岡本真一郎. 2006. 『ことばの社会心理学(第3版)』ナカニシヤ出版.
- ルンティエラ ワンウィモン. 2004. 「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現における語用論的転移: タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育』121: 46-55.
- 崎山理. 1974. 「ジャバ語の敬語」林四郎・南不二男(編)『敬語講座8 世界の敬語』明治書院 94-120.
- 崎山理. 1989. 「ジャワ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂: 209-212.
- 笹川洋子. 1994. 「異文化間に見られる『丁寧さのルール』の比較: 九言語比較調査データの再分析から」『異文化間教育』8: 44-58.
- 柴田紀男. 1995. 「インドネシア語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典 第1巻 世界言語編(上)』三省堂 712-717.
- 清水崇文. 2010. 「中間言語語用論」『第21回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会予稿集』26-31.
- スリ プデイ レスタリ. 2009. 「中部ジャワの若者に見られる敬語の使用特徴」『社会言語科学会第23回大会発表論文集』112-115.
- 富田竹二郎. 1990. 『タイ日辞典(改訂版)』養徳

- 社.
- 辻村敏樹. 1992. 『敬語論考』明治書院.
- 宇佐美まゆみ. 2008. 「ポライトネス理論研究のフロンティア：ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11(1)：4-22.
- 宇佐美まゆみ. 2010. 「人間関係とポライトネス」『日本語学会 2010 年度春季大会シンポジウム A 会場 人間関係の日本語史』：21-28.
- Yamashita, Sayoko O. 1996. *Six Measures of JSL Pragmatics*. Honolulu: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.
- 吉岡泰夫. 2003. 「敬語の社会差・地域差と対人コミュニケーションの言語問題」菊地康人(編)『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店：117-138.